主目的である湘桂作戦遂行のため、その一環である京漢地区に対する陸路後方連絡線を確保することができたのである。

この間、撃滅作戦の主体は、第一戦区の主体は、第一戦区特に湯恩伯軍に対する作戦の指導であった。なお軍は当初まず黄河北岸所在の作戦軍主力を河南岸に集結するを要したが、当時これも中国軍の積極攻勢を予測して、黄河河畔の開戦として指導された。また洛陽の攻略戦及び東進する敵第八戦区軍に対する我が第一軍の霊宝会戦も指導された。

土田氏も文中、河南作戦参加兵の警備交代要員となり、青島、済南、開封、鄭州、許昌（京漢沿線の主要地域）方面の攻略戦に参加……云々と発言している。

中国戦線に現在の林業を思う

愛媛県　神田宗玄

私は、四国高知の新居浜で、大正十三（一九二四）年七月十日、農業、林業を家業とする家の長男として生まれました。兄弟は八人、男四人・女四人という大家族でありますが、父は健在で、事業と共に、村議会などで活躍していました。現在では、八人の兄弟・姉妹というと、驚く人もありますが、当時、農村地帯では、五人以上が普通という時代でありました。

私は、家業のうち林業に、他は後に教職員等になっていきました。昭和十八年春、徴兵検査では、体は良いが近眼のため第一乙種となり、甲種合格というわけにはいかなかったのですが、当時は、第一乙種は甲種と共に現役兵となったのでした。

父は、私が長男であると共に、当然、兵隊に行くだ

ろうとの判断からか、家業のうち林業を覚えさせたのであろうと思います。従って、弟は幼年学校（後自衛隊の事務官）、末弟は後に学校の教員をと進ませたのです。

私が入営しても、父は農・林の他に竹・茶等も副業としてやっていたので、家の生活に支障はなく、軍務に専念しても差し支えなしと、安心して入隊することができました。

昭和十八年秋、丸亀の連隊に入り一週間、北支の潞安（山西省南部、平陽東方＝長治）で野戦教育を受けました。野原での実戦教育でありました。隊員は、元鯨兵団＝第四十師団出身者、高知県人が多かったのです。一期の検閲は入隊三ヵ月後でありました。

内務班は、思ったより酷くはなかったですが、北支の冬の寒さは、我々南国育ちの者にとっては酷しいものでした。昭和十九年になってから、武漢（武昌・漢口）へと、揚子江を遡り、毎日四〇キロぐらいを行軍しました。

昼間は在中米軍の飛行機（P51やB25の銃爆撃）が来るので、主として夜間に歩くのですから、余り付近の様子は分かりませんでした。付近には中国軍の密偵がいて、少数の部隊だと攻撃して来る。二、三人で食料を捜しに行くと皆殺しされてしまう。こちらは、腹が減るので捜しに行くとやられる。

私は師団長の当番の一人でしたが、閣下は負けん気の強い人で、他の部隊より大変でした。しかし、食事などを持って行くと、閣下は我々兵隊に対しても偉ぶることなく話をしてくれました。

昭和二十年になり、終戦近くになった頃、食料は無くなり、栄養失調だったのか、夜は夜盲症のためか眼が見えなくなりました。全部徒歩での行軍でしたが、その間、作戦・戦闘はなく警備が主でありました。

従って、一番辛かったのは食料の無いことでした。私は本部だから良かったのですが、元の中隊での行軍であったら、休む暇もなし、警戒や、食料調達などで大変だったでしょう。休憩の時は皆疲れているから眠ってしまうので「出発」と言って、皆を起こしてから出発しなければなりません。

食料の塩は、幸いにして岩塩があったから、足りないながらも助かりました。食料は出発時、二週間分を靴下に入れて持って来たのですが、重かったり、補給がつかぬから、休憩時の飯盒炊さんの時には粉味噌で野菜等を入れた汁を作る。重い物を背負わせる苦力の苦労も大変だったと思います。当時、物資も兵器も不足していたので、内地から来る兵隊の短剣の鞘は竹筒でした。水筒は全員に行き渡らぬので、一部は竹筒でありました。

私は、入隊前、山林業や農業をしていたので体は鍛えてあったので死なかったのですが、都会の人間は若くても体が大きくても、体力が耐えられず、途中で死んでしまった人もいました。私は本部勤務だし、師団司令部だから助かりました。師団長閣下も良い人だったから良かったのですが、行軍でも負けん気の強い人なので大変ではありました。

兵器・弾薬・手榴弾はありましたが、食料の補給がつかず苦しみました。先程申したとおり、毎日が夜行軍で、昼は田舎の農家の所に住む。しかし、農家に食料を調達に行き殺されてしまった兵隊もあります。少数の隊だと攻撃されるので危ない。部隊が大きければ襲撃をされませんでした。

一日、四〇キロ歩いたのですが、大きな部落はありませんでした。中国人は田舎育ちの人が多く、交通機関（汽車や自動車）が少ないので歩いても平気でした。農業も化学肥料無しで耕しているようでした。家畜は牛と豚が多く、馬は少ないようでした（馬は余り見かけなかった）。

私は、武漢・衡陽・長沙も通りましたが、はじめは北支、万里の長城近い所だったのですが、だんだんと中支へ行き、気候も暖かくなりました。しかし、長い長い道の行軍は辛かったのですが、上司の人々のことはよく覚えています。原曹長・小林軍曹・栗田経理軍曹等々、それぞれ、思い出の多い人達でした。

終戦近くなっての行軍地は、全部敵地です。永い駐留地とは違うのです。戦死より行軍と食糧難、病気で死んだ人が多いのです。敵地で行軍中落ちると殺され

てしまうのです。歩兵の表芸というか本業は、射撃・剣術と言いますけれど、実際は行軍、特に夜行軍に馴れることだったと、今でも思っています。

終戦の昭和二十年八月でしたが、終戦後はアメリカ給与というか、中国給与というか、連合軍の管理下で、上海までの行軍でした。今までの夜行軍から昼間の行軍になったわけであります。

しかし、上海までの行軍の途中、中国人が兵隊の背のうや図のう等を横から奪いに来ました。我々は兵器を持っていない。相手は戦勝国民なので、対抗できず残念に思いました。

体力の弱い人、気力の弱い人、あるいは病気のため、行軍の途中で死んだ人もおりました。今は戦友会も無いが、「中国まで官費で旅行したからいいではないか」などと、言う人もあるのですが、戦地での人の苦しみが分からない人の言うことであります。

私は若い頃から仕事で、困難に耐える気力と体力と経験を積んできたのです。従って、七十歳半ばを越した現在でも、体力もあり、運動もしていたので、入院などしたこともなく今も元気でいます。これは、軍隊での苦労のお陰かもしれません。よく、昔から「若い時の苦労は、買ってでもせよ」という言葉がありますが、本当かもしれません。

今は林業で、林道造りや、庭木の手入れをしたりしています。新浜市には、老人で一人暮らしの人も多い。田圃があっても、自分で耕作せぬ人もいる。庭木の枝打ちなど仕事は多い。仕事をすることによって若さを保って、現役で仕事ができていることを嬉しく思っています。曽孫もいます。今のところは心配も無いし、自分の健康管理が一番大事だと思っています。

私は十年～二十年位前までは、有名な山に入っています。四〇〇〇メートルの林道を造るために、百年もする杉・檜を、何万本も切り出した体験があります。

愛媛県の松山市には不在地主も多い。それを請け負ったり、買手を世話したりするのは大きな仕事なのです。このような仕事は、若い時から好きであったか

らです。

昔は、山から山へ、ワイヤーを掛けて木材を降ろしました。しかし、今はチェーンソーでやっているのです。能率は上がったのですが、今は、建材が以前と違って、外材などの合板類に代わっています。そのため、日本の林業は振るわなくなってしまいます。

昔は、細い木も大切に育てたから、採られたら大変でしたが、今は、一抱えもある木がそのままになっています。これは、今は外材、合板の時代になってしまったからです。

私は、戦後の林業の変遷を身をもって体験し、見て来ています。これが私の人生です。今の林業は大変です。山持ちが、山を持っていても、山の管理ができず、我々もそれができないのです。田畑は一年勝負だが、林業は三十～五十年です。今は林業は政府補助でやっています。政府から金を借りた林業家はつぶれて行く。金利も払えず、その金額も大変です。

私の軍隊生活、中国での戦争体験からみても、今の林業の姿に似ているような気がしないでもありません。しかし、私も何とか戦争末期を倒れることなく、死ぬことなく耐えて、現在に至っています。私の親から譲られ、残された林業の将来を思いつつある今日この頃であります。

満州・北支・本土防衛
三度の召集

岩手県　菊地政男

大正六（一九一七）年三月二十一日、本籍地、岩手県江刺郡稲瀬村大字照沢字、菊池正二の長男として生まれ、現住所は、岩手県胆沢郡金ヶ崎町六原前二ッ森です。

昭和十三（一九三八）年九月九日、歩兵第三十一連隊留守隊に入隊、第六中隊編入、同年十一月二十六日、歩兵第三十一連隊補充要員として、弘前を出発、新潟港より出帆、十二月一日、朝鮮羅新上陸、十二月三日、満州（現中華民国東北地方）牡丹江省綏陽県観